

世田谷の歴史地理に関する一考察

岡島 建

本学地理学専攻助教授

1. はじめに

国土館大学（世田谷校舎）は、世田谷区世田谷に位置している。隣に区役所もあるこの場所は、旧来からの世田谷の中心地と思われるが、果たしてそうであろうか。現在の世田谷区には下北沢・三軒茶屋・二子玉川などの繁華な場所もあるが、総じて山の手の高級住宅地とイメージされることが多い。この世田谷という地域をどうとらえたらよいのか。

現在の世田谷区は人口783,152人、人口密度13,484人／km²（ともに2001年4月現在）であり、人口規模から言えば岡山市や熊本市よりも大きく、地方中心都市にも匹敵する。しかし土地利用の面では、用途地域指定の91%が住居系であり、実際の宅地面積も全区面積の46%を占めており¹⁾、都市機能の集積には偏りがあって、独立した一個の都市ということとはできない。いうまでもなく、世田谷区は大都市東京の一部分を構成する地域である。現代都市は一般に都心地域への都市機能の集積が進むにつれて、周辺地域へ都市化の波を広げ、都市地域を拡大・発展させて行く。東京都心や新宿・渋谷から西へ進んだ都市化の波が、区の東から西へと進行したと考えるのが常識的であろう。新宿や渋谷を起点に放射状にのびる鉄道や道路沿いに宅地化が進んで、

現代ではほぼ終了したといえよう。結局、下北沢は小田急線の、三軒茶屋・二子玉川は東急田園都市線の主要駅の繁華街であって、世田谷地域（区）の中心性をもつ場所とは必ずしもいえないのである。

本研究は歴史地誌学的方法によって、主として領域・交通路・土地利用の点に注目しながら、世田谷の景観変遷を明らかにしようとするものであるが、本稿ではまず、従来の研究、対象地域の概観を述べた後、原始古代から時代に沿って進み、現代の世田谷の基盤をつくったと考えられる近代までを述べ、近現代における変容については稿を改めたい。なお、世田谷区の成立は1932年（昭和7）であり、それ以前においてほぼ現在の世田谷区の範囲を指す場合に「世田谷地域」と呼称する。

2. 従来の研究

歴史地誌的な研究、あるいは景観変遷史的研究は、歴史地理学の伝統的な方法による研究といえ、これまでに数多くの研究蓄積がある²⁾。近年の成果としては、『歴史のふりい都市群』シリーズ（全12巻）³⁾ や『地図で読む百年』シリーズ（刊行中）⁴⁾ がある。前者は、全国約150の都市を網羅する他に例を見

世田谷地域史の研究としては、世田谷区による『新修世田谷区史』や『世田谷近・現代史』自体⁷⁾が膨大な研究成果といえよう。近年の研究例としては、鈴木勇一郎⁸⁾が、地元地主が世田谷線敷設や土地区画整理事業によって大正期の宅地開発を主導していく過程を明らかにしている。奥須磨子⁹⁾は「村是」を資料として、大正初期の駒沢村の土地利用と住民の経済活動・消費生活について明らかにしている。このほか世田谷区誌研究会発行の雑誌『せたかい(世田谷)』があり、区内在住の郷土史家による随筆風の論考が多く掲載されている。『せたかい』には1960年代には地理学者の参加も見られ、北村嘉行¹⁰⁾が世田谷の工業立地やボロ市の当時の状況について記述している。また歴史地理学的研究としては、桜井正信¹¹⁾が供養塔を対象として世田谷の村落開発の構造分析を試みているのが注目されるが、近年の研究例はみられない。

世田谷地域は東京の西郊に位置する。本章では、世田谷地域を含む東京西郊の自然環境の概略を述べた後、歴史的な発達過程をまとめることにより時代区分を行う。

東京西郊の大部分は武蔵野台地上に位置する(図1)。武蔵野台地は、青梅付近を扇頂として古多摩川によって形成されたとみられる扇状地状の台地で、西から東へ緩く傾斜している¹²⁾。中位の武蔵野段丘面上は平坦であるが、東部にはより古い段丘面である荏原台・淀橋台と南部・西部にはより新しい段丘面である立川段丘があり、武蔵野台地は大きく分けて3段の段丘面を構成している。立川段丘面と武蔵野段丘面の境は南部では10~20mの崖となり、国分寺崖線と呼称されている。また古多摩川の堆積物である段丘礫層を富士箱根火山起源の火山灰である関東ローム層が厚く覆っている。

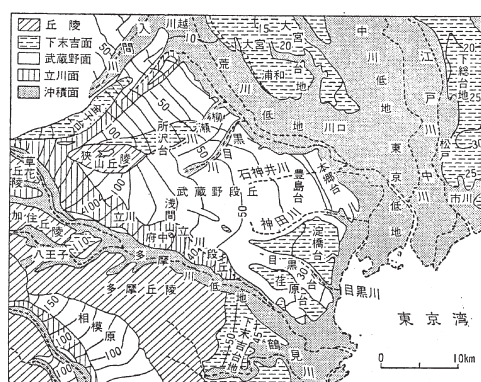


図1 東京付近の地形区分
出典：山鹿誠次『江戸から東京そして今』
大明堂、1993、81頁。
(原図：貝塚爽平『東京の自然史』紀伊國屋
書店、1979、30頁。)

台地の北側を入間川・荒川が、南側を多摩川が東へ流れ、石神井川・神田川などの荒川の支流や野川などの多摩川の支流が段丘面を開析している。また東部には渋谷川（古川）、目黒川など直接東京湾に注ぐ小河川も見られる。これら段丘面を開析する河川は古多摩川扇状地の湧水帯にあたる部分で湧き出した地下水を水源とするものが大部分で、神田川の井の頭池、石神井川の三宝寺池などは谷頭の湧水池である。

台地上は関東ローム層が覆うため雨水は浸透しやすく、乾燥していた。したがって平坦面はスキの草原などとなっていたと考えられ、開析された谷の部分や段丘崖のみ植物が繁茂したとみられる¹³⁾。台地上に雑木林が展開し、いわゆる「武蔵野」の景観が展開するのは近世の新田開発以降のものという。

（２）東京西郊の発達過程と時期区分

城下町江戸成立以前のこの地域では、縄文時代以来、湧水の得られる場所には古くからの集落もでき、武蔵野段丘崖下の立川段丘面には武蔵国府や国分寺が置かれ、地域の拠点となっていた。しかし台地面の大部分は、前述のように高燥な原野地帯と考えられ、採集・狩猟活動と焼き畑などが行われていたにすぎない。徳川家康により江戸に幕府が開かれると、この地域の多くは幕府・旗本領となり、五街道の一つ甲州街道が通じ、府中や調布、新宿などには宿場が置かれた。また神田川は上水として利用されたが、増大した江戸の人口に対処するため、1654年多摩川の水を羽村で取って玉川上水が開削された。自然流下によるため扇頂部から台地の尾根筋を直線的に東西に通じさせた。この玉川上水を利用して

江戸中期以降武蔵野の新田開発が進められた。原野を畑に変え、作物の江戸への供給が拡大した。また、薪炭林としての雑木林やアカマツ林が育成された。江戸近郊のこの地域は、江戸への食料や燃料の供給地として発展することになる。明治になり江戸が東京と変わり、1889年甲武鉄道（八王子―新宿間）が開通し、輸送力や輸送方法に変化は見られたが、この地域は依然として蔬菜や材木を東京に送り続けていた。西北部では1894年に青梅鉄道と川越鉄道が開業し、さらには1913年には京王電気軌道が一部開通する。これらの鉄道の開業は、東京から武蔵野への距離を縮め、文人が逍遙しあるいは別荘を構えたが、本格的な都市化には至らなかった。むしろ小金井が近世以来の花見の名所であったことなどからも、江戸東京の近郊としての基本的な地域の性格は変わらなかったと思われる。1923年に起きた関東大震災を契機に、都心から郊外への居住地移動が起こり、また1920年代以降の郊外鉄道の発達により郊外から都心への通勤という新しい生活様式が普及していったことが、これらの地域の都市化・宅地化を進めたといえる。

以上から、これらの地域は江戸東京との関係によって発達したことは明らかであり、①江戸成立以前の原始・古代・中世、②幕藩首都江戸の近郊にあたる近世、③首都東京の近郊に位置する近代前期、④拡大する東京の郊外として大都市の一部を構成していく近代後期・現代、に区分されるものと考えられる。

4. 原始・古代・中世の世田谷

世田谷地域は、武蔵野台地の東南部に位置

し、南端を多摩川が東流する。その多摩川沿岸の沖積低地を除き、大部分が洪積台地上に当たる。

図2は、原始・古代遺跡の分布と地形を表している。標高約35m以上の洪積台地面に縄文遺跡が広く分布している。これに対し、弥生遺跡はほとんど見られない。台地上の森や

野での採集・狩猟と拡大した内湾・入江での漁撈によって生計を立てていた縄文時代にはこの地域に広く人々の活動が営まれていたといえる。まだ多摩川低地の開田は困難であり、弥生期の稲作に適当な谷地は余り多くなく、弥生遺跡は限られたものとなっている。しかし、古墳時代になると、世田谷地域南部に多

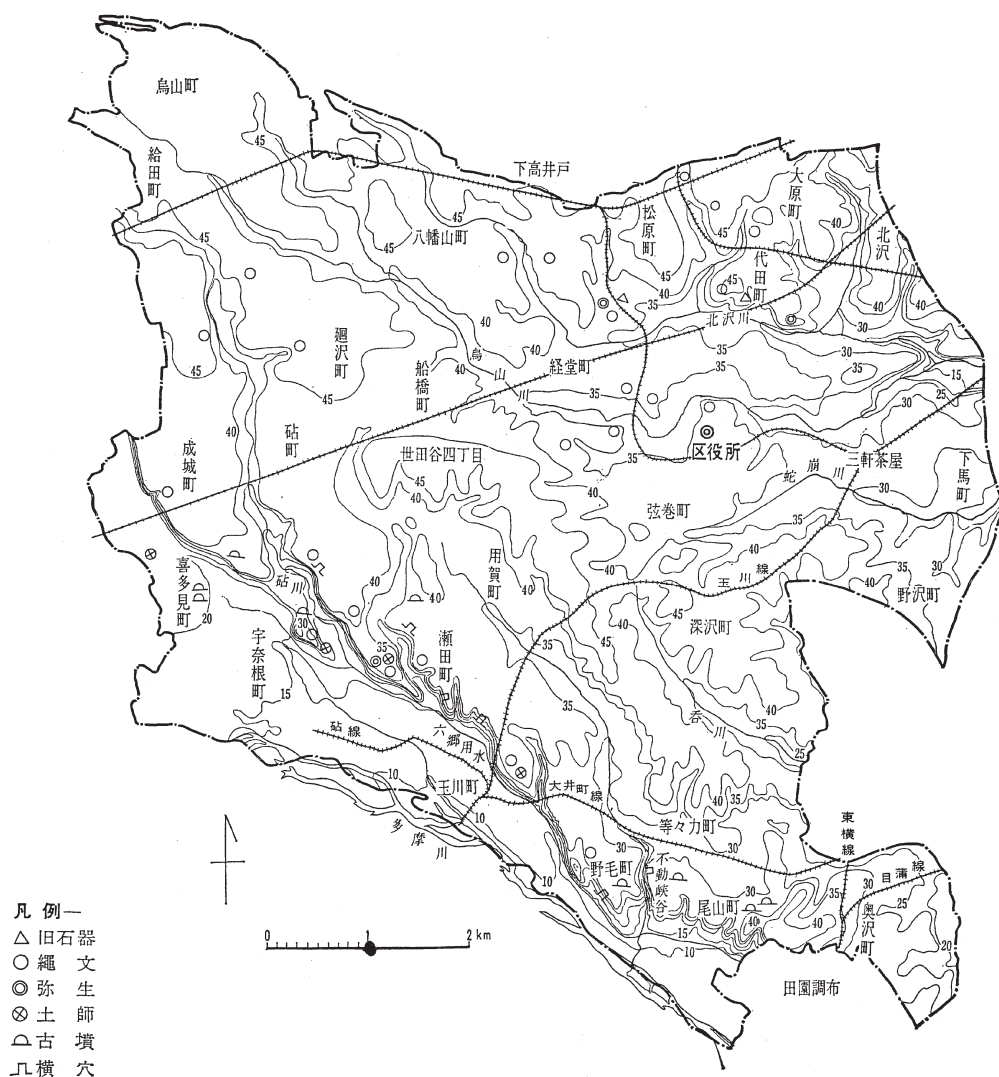


図2 原始・古代遺跡の分布と地形
 出典：『新修世田谷区史 上巻』東京都世田谷区、1962、110頁。

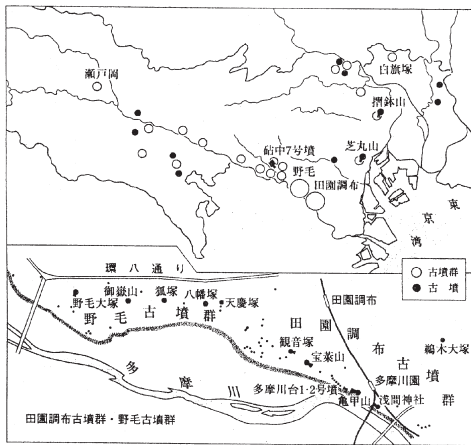


図3 東京の古墳分布
出典：竹内誠ほか『東京都の歴史』山川出版社、1997、35頁。

くの古墳がみられ、台地南端の段丘崖上に続いている。図3は、現在の東京都の範囲での古墳の分布図であるが、世田谷地域南部の野毛・田園調布古墳群の集積度が高く、その分布が多摩川の中上流部に連続していたことが分かる。中でも野毛大塚古墳は関東最大級ともいわれ、この時代の中心的な場所であったと推測される。ここに多摩川流域文化圏が形成されたと考えられる。古代統一国家を成立させた大和政権は、この地域を武蔵国とし、国府を現在の府中市に置くが、ここは世田谷地域の上流側に当たる。古代の官道は、世田谷地域を通過することはなかったものの、比較的中心に近い地域であったとはいえよう。ただし、現在の世田谷地域は荏原郡と多摩郡の境界域に位置している(図4)。

律令国家が崩壊し、中世武士の時代になると、この武蔵国東部の一帯では江戸氏が勢力を広げる。世田谷地域では一族の木田見氏の名がある。およそ12～15世紀のことである。鎌倉に幕府が成立すると、鎌倉が関東の中心

となり、関東各地を支配するために街道が整備された。これが鎌倉街道で、主要な上・中・下の三道のうち、「中道」が世田谷地域を通過していた。三田義春の研究¹⁴⁾や『新編武蔵国風土記稿』の記述¹⁵⁾などから、世田谷地域でのルートを図4中に記した。二子の渡しまたは野毛の渡しで多摩川を渡り、北上する3筋のルートが推定されているが、鎌倉は幕府滅亡後室町期にも鎌倉府として関東地方政府であり続けたから、時代によって道が異なることは十分考えられる。14～16世紀には足利氏の一門である吉良氏が世田谷村に居城(図4中A)を構えた。図4中に示した吉良氏の領地と伝えられる村々¹⁶⁾は鎌倉街道とその周辺に位置し、世田谷村付近に吉良氏ゆかりの寺社(図4中B～E)が配されている。16世紀に関東において北条氏の勢力が拡大すると、吉良氏は北条氏と姻戚関係を結んでその傘下に入る。吉良氏の周辺に北条氏家臣の領地が配置されている(図4)。この頃、北条氏の命により市立てされたのが世田谷新宿の六斎市¹⁷⁾で、これが現代にも続く世田谷ボロ市の起源といわれる。

5. 近世の世田谷

近世における世田谷地域は、彦根藩世田谷領が成立する1633年を境に所領構成が大きく変わる。それ以前には江戸氏の末裔である旗本喜多見氏の領地など以外、大部分が幕府領であるが、以後にはこの地域の中央部に彦根藩領が置かれ、世田谷村には代官所が設置される。西北部や東部の村々では、旗本領や増上寺領、およびそれらの入組村が増え、幕府領は大幅に減少している¹⁸⁾。交通路も江戸と

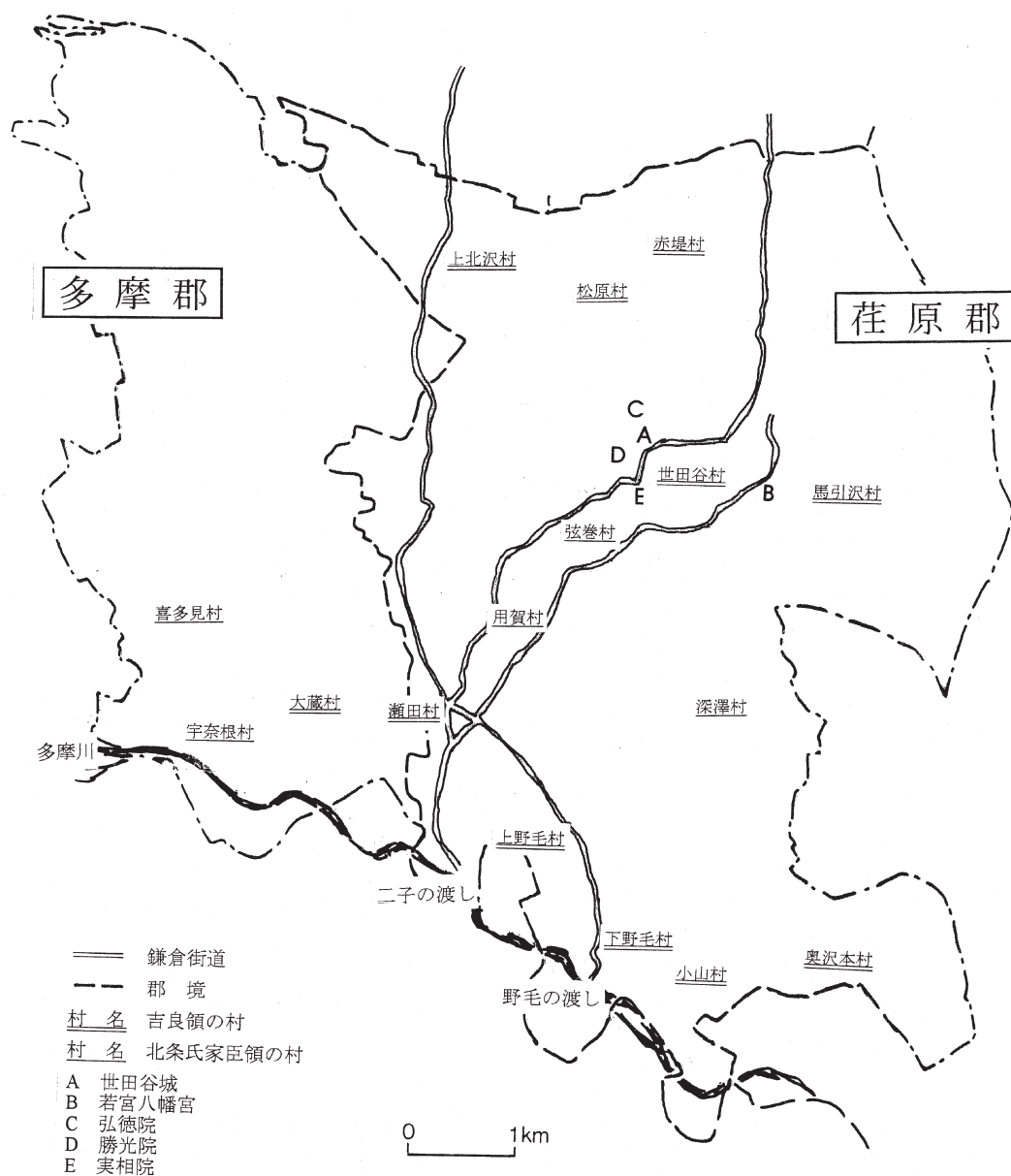


図4 中世世田谷地域の概要

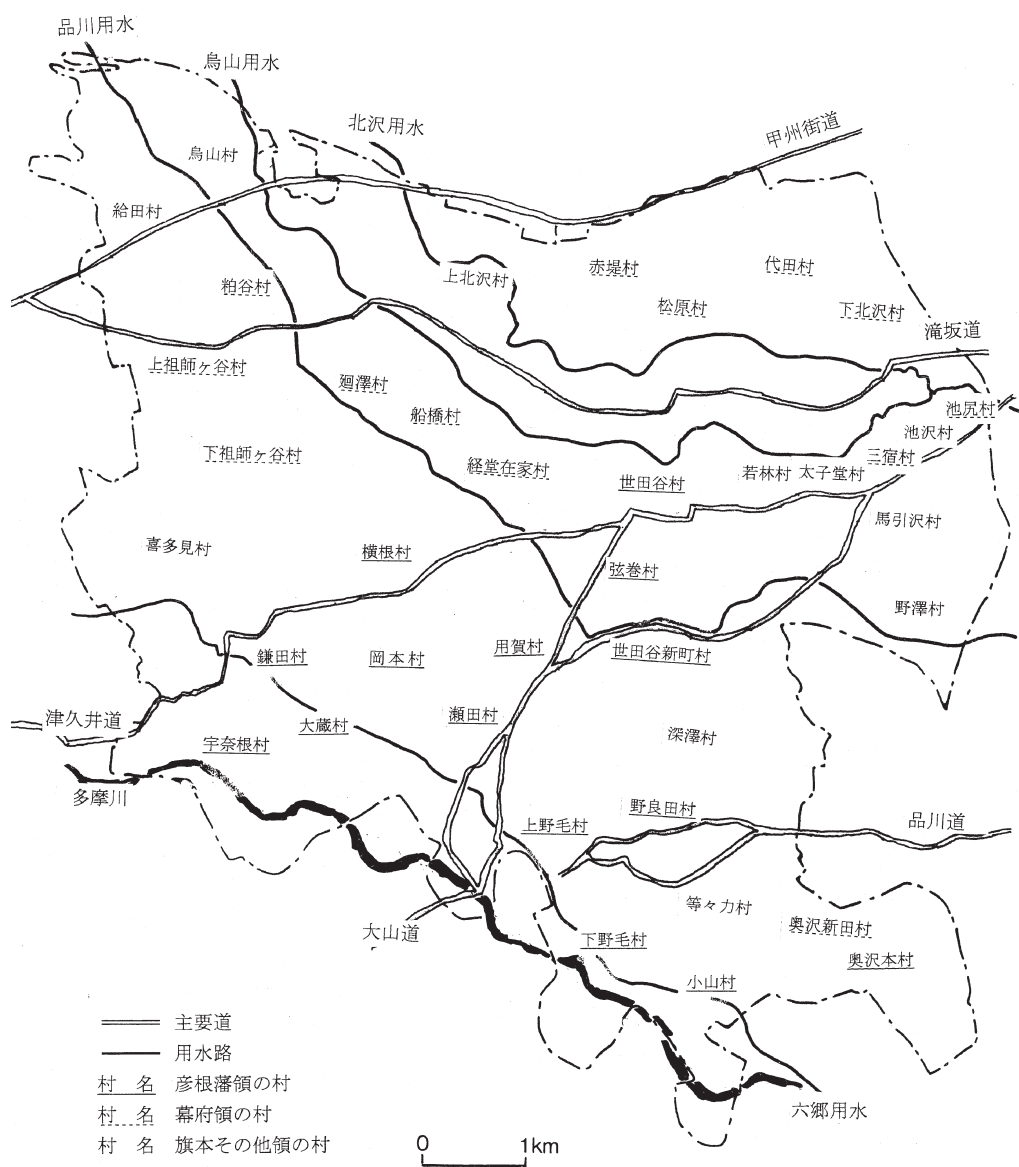


図5 近世世田谷地域の概要

遠方を結ぶ街道が設定されるため、世田谷地域を通るものも甲州街道・大山街道など東から西へ向かうものとなる（図5）。

1810年に編纂された『新編武蔵国風土記稿』¹⁹⁾は、武蔵国の地誌書として著名なものであるが、これには世田谷地域の村々の様子も簡潔に記述されている。主な記載項目としては、概要のほか、小名・神社・寺院・旧家・墳墓・山川・水利・屋舗・高札場などである。このうち概要には、周辺村々との位置関係、村の広がり（長さ）、主要道、村の起源と支配関係、家数、土地条件、などが記載されている。そこで土地条件についてみると、「土地ノ高低ハ、概シテイヘバ平カニシテ、南ノ方ニハ小高キ地交レリ。サレバ用水ヲ引クニヨシナクシテ、天水ヲ俟テ耕作ヲナス地ナルニヨリ、早損ノ患多シトイウ」（弦巻村）とか、「地形ハ平カニテ用水不便ナレバ、水田少ナク畑多シ」（用賀村）、あるいは「村ハ平地トイヘドモスコシキ高低アリ。土性ハ野土ニシテ粗地ナリ。皆畑ナレバ…」（新町村）というように、大部分の村々において、水利の便が悪く畑が多いとの記載がある。畑より田の方が多いとの記述があるのは掲載40ヶ村のうち、北沢用水に面する上北沢村のみである。17世紀後半に玉川上水からの分水である北沢用水・烏山用水・品川用水が引かれ、開田も進んだと一般には思われるところである。しかしながら『新編武蔵国風土記稿』の記述によれば、北沢・烏山用水は用水として用いられ、谷地の開田を進め、これによる開村もみられるのに対し、台地上面を貫流する品川用水については、上流部の粕谷・廻澤村では用いられたが、用賀村より下流部の村々では水量も減少し、用いることができなかったと

の記述が多い。たとえば、「品川用水トテ村ノ東ノ端ヲ流ルル小川アリ。世田ヶ谷村ヨリ入り新町へ通ズ。サレドモ水低ク地高ケレバ、用水トスベカラズ」（用賀村）とある。

次に、明治5年の『東京府志料』²⁰⁾によって近世末の世田谷の田畑や物産の状況を見る（表1）。まず田畑面積を見ると、すべての村々において田より畑が多く、野沢・奥沢新田・世田谷新町の3村は田が全くないが、これらは『新編武蔵国風土記稿』の記述とも一致する。田の割合が高いのは奥沢村・代田村・池尻村・等々力村であり、田の面積が大きいのは世田谷村・上北沢村・瀬田村であり、いずれも用水筋の村々にあたる（図5）。次に物産について見ると、大麦・小麦が多い村が多く、金額では米がこれに次ぐ。その他のものとして、筍・茄子・薪・鶏卵などが並び江戸近郊農村地帯としての性格が表れている。

6. 近代（前期）の世田谷

廃藩置県後府県制の成立により、荏原郡は東京府に、多摩郡は神奈川県に属した。明治26年(1893)に多摩郡が東京府に移管されるまでは、世田谷地域は府県境にまたがって位置することとなる。なお明治22年の町村制施行により荏原郡の25村が世田谷村・駒沢村・玉川村・松沢村の4村に、多摩郡の15村が砧村・千歳村の2村となった。

次ぎに近代の人口推移について述べる。図6は近現代における世田谷地域（1935年以降世田谷区）の人口推移である。1920年代より人口が急増していることが明らかである。いうまでもなく、この1920年代から1960年代が世田谷の宅地化が進行した時期であり、地域

表1 「東京府志料」(明治5年)にみる世田谷の村々

村名	戸数	人口	田 (㎡)	畑 (㎡)	正租 (円、銭)	物産額 (円)							
						米	早稲米	大麦	小麦	大豆	小豆	蕎麦	栗
三宿	30	133	36,794	144,247	26.60	129	21	141	86	6	6	18	9
池尻	25	133	39,678	75,622	9.40	173	13	120	35	6	8	30	5
池沢	32	171	673	319,942	34.34	3	21	180	86	6	8	15	
太子堂	57	275	61,184	446,648	6.65	287	67	222	91	33	33	57	21
上馬牽沢	72	428	118,533	847,283	103.99	574	300	531	350	52	57	109	28
中馬牽沢	35	177	22,706	160,080	2.00	176	24	148	56	22	22	11	
下馬牽沢	55	280	82,738	620,477	70.91	280	41	268	66	9	20	9	38
野沢	35	159	0	333,794	38.13		34	223	175			45	145
奥沢本	26	145	37,682	53,337	6.66	102		300		95	110	35	58
奥沢(新田)	113	666	0	880,995	119.28		513	1,125		300	117	39	236
深沢	83	486	136,264	1,106,730	111.43	558	100	480	433	60	45	45	210
若林	46	232	118,220	383,092		533		200	22	20	22	100	20
経堂在家	62	354	122,617	435,409	52.39	450	50	438	184	39	19	50	83
上北沢	85	487	221,919	997,630	2.38	383	400	1,000	500	50	60	167	75
下北沢	103	516	82,261	870,725	97.01	425	54	432	188	12	40	105	50
松原	107	530	91,225	974,711	109.89	633	53	521	216	20		56	18
赤堤	53	277	67,474	633,742	69.21	433	46	316	43	17	20	35	58
代田	105	615	98,425	174,759	126.05	440	214	600	316	32	56	117	50
世田谷	315	1,511	251,657	2,154,659	205.70	838	333	1,698	1,875	373	268	900	583
世田谷新町	68	377	0	421,218	33.54			192	163	30	7		20
弦巻	61	320	129,287	580,387	51.75	295		382	375	53	34		33
用賀	154	740	177,824	1,028,860	82.55	1,108	684	1,522	578	173	36	92	185
瀬田	114	670	216,744	902,108	80.38	1,615		847	625	167	14	90	50
上野毛	27	162	11,298	369,002	30.13	50		171	94	58	7		67
下野毛	68	439	53,596	629,002	54.27	173		393	375	409	18		174
野良田	49	288	67,709	561,525	43.59	431		265	375	200	18	100	250
小山	28	148	45,173	183,180	16.12	159		41	125	67	13		37
等々力	182	1,099	398,677	920,683	89.63	2,060	326	1,152	934	322	122		312
計	2,190	11,818	2,690,356	17,210,447		12,308	3,295	13,907	8,365	2,631	1,178	2,224	2,815

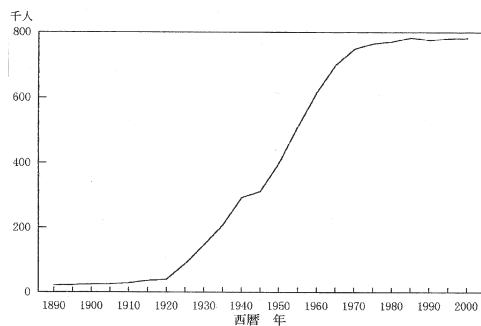


図6 世田谷地域(区)の人口推移
資料：1890～1940『東京府統計書』、1945～2000『住民基本台帳』
注：1945年は、1946年の数値

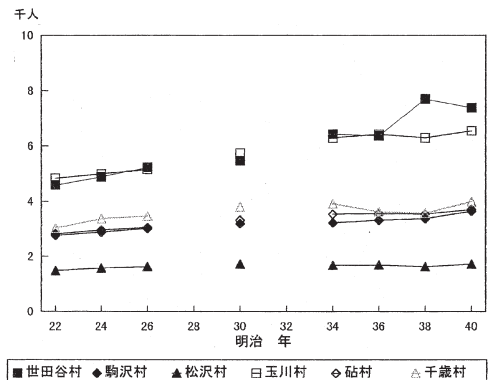


図7 明治期の世田谷地域各村の人口推移
資料：『徴発物件一覧表』陸軍省総務局

の景観も大きく変わったと考えられる。図7は明治期の世田谷6村の人口を『徴発物件一覧表』によってみたものである。漸増傾向にはあるが大きな変動ではない。東京に最も近

い世田谷村の増加率が最も高いが、東側の松沢村・駒沢村と西側の砧村・千歳村の間には違いはなく、地域差はみられない。図8は大正期の動向を『東京府統計書』によってみた

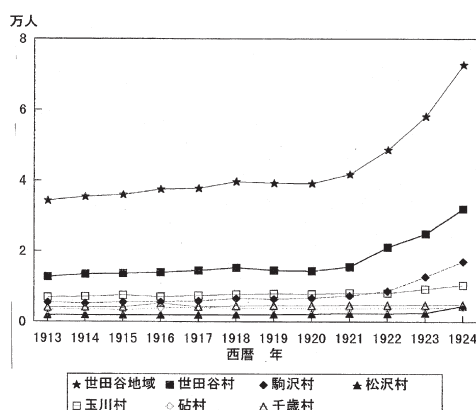


図8 大正期の世田谷地域各村の人口推移
資料：『東京府統計書』東京府

ものである。1920年代に入るまで各村ともわずかな増加が続く。1920年代に入って東京に近い世田谷村と駒沢村では人口が急増し始めるが、他の4村には大きな変化はない。

最後に土地利用について述べる。図9は明治15年頃の2万分の1迅速図から作成した土地利用図である。集落は甲州街道・大山街道沿いなどに街村がみられる他は、塊村が散在しており近世以来の農村集落とみられる。武蔵野の新田開発地域にみられるような短冊状の新田村は世田谷地域にはみられない。田は烏山用水・北沢用水や仙川・六郷用水沿いに谷線状に分布している。台地面は畑の他、森林・雑木林の割合も高い。前章で述べた品川用水による開田が少ないこと、品川用水以外の用水筋に田が分布することも読みとれ、近世から継続する農村景観が展開していたと判断できる。図10は大正10年頃の地形図であり、これにより同様の土地利用図を作成した(図省略)。集落は東部を中心に全体的に拡大しているが、面的な宅地化・宅地開発は駒沢村の「信託用地」以外には認められない。田畑の分布に大きな変化はないが、森林・雑木林

は大幅に減少している。東部の三軒茶屋周辺に軍施設の立地がみられるほか、大山街道上に玉川電鉄、甲州街道沿いに京王電軌が、それぞれ多摩川の砂利輸送を目的として開通した²¹⁾。前述の「信託用地」は、玉川電鉄から電灯電気の供給を受けており、この地域における沿線宅地開発のはじめという²²⁾。まだ本格的な宅地化・区画整理が始まる以前の1920年代はじめの景観を表すものである。

7. おわりに

本稿により把握された点をまとめ、そこから考えられることを提示する。

古代には南部多摩川沿いに古墳の集積地がありこの地域を中心に多摩川流域文化圏に位置していたが、荏原郡と多摩郡の境界域にあった。このことは時代によっては必ずしも大きな意味を持たなかったとも思われるが、近代のはじめには再び府県境となる。中世には鎌倉街道が通じ、世田谷村を中心に足利一門の吉良氏の支配地となる。鎌倉に従属する地域といえる。関東の覇者が北条氏となると、小田原に従属する地域となる。近世には旧吉良氏の領地の多くが彦根藩の領地になり、世田谷村に代官所がおかれる。中世から近世にかけてこの地域では世田谷村が中心的意味を持っていたが、甲州街道に近い西北部の地域とは関わりがないように思われる。そもそも本稿でいう世田谷地域は1932年の世田谷区成立によって作られた行政域であるから、そこに属した6ヶ村(合併当時2町4村)、さらにはそれらに含まれた近世の40ヶ村は互に関連性が強くはなく、世田谷地域という設定に無理があるとも当初は思われた。しかし、



図9 明治15年頃の世田谷地域の土地利用

資料：2万分の1迅速図「内藤新宿（明治13年測量）」「二子村（明治14年測量）」
「布田駅（明治13年測量）」「登戸村（明治14年測量）」



図10 大正10年頃の世田谷地域の概観
 (5万分の1地形図「東京西北部(大正10年部分修正)」
 「東京西南部(大正11年部分修正)」に加筆)

東部南部の村々には世田谷村を中心とする地域的連関が推測される。

農村地域としては中世から近世にかけて開拓・開村が行われ、特に近世中期以降畑作物の江戸への供給地として畑の拡大も進められた。ほとんどの村が畑主体の村であった。このことは地域支配の制度が変わる近代になっても変わりがなく、東京への畑作物の供給地としての役割が継続した。街道沿いに開通した玉川電鉄や京王電軌も多摩川の砂利という新しい生産物を東京に運ぶことが、はじめの役割であった。

今後は、近世の地誌書や村絵図、近代の統計類や大縮尺地図によってミクロな分析を重ね、世田谷地域の景観変遷を明らかにしていきたいと考えている。

注

- 1) 『世田谷の土地利用1998』世田谷区都市整備部、1998、8-9頁。
- 2) 有蘭正一郎・遠藤匡俊・小野寺 淳・古田悦造・溝口常俊・吉田敏弘編『歴史地理調査ハンドブック』古今書院、2001、3頁。
- 3) 藤岡謙二郎編『歴史のふるい都市群1ー関東とその周辺の都市ー』大明堂、1984。
山田安彦・山崎謹哉編『歴史のふるい都市群2〜12』大明堂、1989-1997。
- 4) 平岡昭利編『北海道 地図で読む百年』古今書院、2001。
平岡昭利編『東北 地図で読む百年』古今書院、2000。
平岡昭利・野間晴雄編『中部1・2 地図で読む百年』古今書院、2000。
平岡昭利編『中国・四国 地図で読む百年』古今書院、1999。
平岡昭利編『九州 地図で読む百年』古今書院、1997。
- 5) 藤岡謙二郎監修『南海道の景観と変貌（七道の景観と変貌Ⅱ）』古今書院、1984。

藤岡謙二郎監修『西海道の景観と変貌（七道の景観と変貌Ⅲ）』古今書院、1987。

藤岡謙二郎監修『東山道の景観と変貌（七道の景観と変貌Ⅳ）』古今書院、1982。

藤岡謙二郎監修『北陸道の景観と変貌（七道の景観と変貌Ⅴ）』古今書院、1995。

- 6) 山鹿誠次「地域社会の変化―杉並の変容と江戸・東京―」（『江戸から東京そして今』大明堂、1993）、80-115頁。
- 7) ①『新修世田谷区史 上巻』東京都世田谷区、1962。
②『新修世田谷区史 下巻』東京都世田谷区、1962。
③『世田谷近・現代史』東京都世田谷区、1976。
- 8) 鈴木勇一郎「近郊農村の都市化と宅地開発―東京府荏原郡世田谷町における開発を事例として―」地方史研究48-3、1998。
- 9) 奥須磨子「東京西郊における農村民の生活―大正初期の駒沢村―」（原田勝正・塩崎文雄編『東京・関東大震災前後』日本経済評論社、1997）、93-124頁。
- 10) 北村嘉行「世田谷の工業の性格」世田谷14、1962。
北村嘉行「最近のボロ市」世田谷15、1963。
- 11) 桜井正信「玉川周辺の歴史地理学的研究―とくに地域開発の構造分析とその方法―」駒澤地理3、1965。
- 12) 貝塚爽平『東京の自然史』紀伊國屋書店、1979。
- 13) 武内和彦「水が育てた豊かな台地―武蔵野の水と緑―」（中村和郎・小池一之・武内和彦編『日本の自然 地域編3 関東』岩波書店）、96-104頁、1994。
- 14) 三田義春編著・東京都世田谷区教育委員会編『世田谷の地名：区域の沿革・地誌・地名の起源 下』東京都世田谷区教育委員会、1989。
- 15) 近世の地誌書である『新編武蔵国風土記稿』（詳しくは8頁で記述）中、たとえば「上野毛村」の項に「古街道ト云アリ、…（中略）…古ヘノ鎌倉海道トイヒ伝フ」とある。
- 16) 『新編武蔵国風土記稿』中に、吉良氏の所領であったとの記述がある村のみを示した。「北条氏家臣領の村」についても同様である。
- 17) 前掲7) ①304-311頁。
- 18) 前掲7) ②440-483頁。なお、図5中の各村の領主区分については『新編武蔵国風土記稿』の記述によった。

- 19) 間宮士信ほか編・蘆田伊人編輯『新編武蔵国
風土記稿』(『大日本地誌大系 第5～15巻』雄
山閣、1929-33復刻)。
20) 『東京府志料』(東京都公文書館により1959-
1961復刊)
21) 前掲7) ③ 587-595頁
22) 前掲7) ③ 736-738頁。

参考文献

- 有蘭正一郎・遠藤匡俊・小野寺 淳・古田悦
造・溝口常俊・吉田敏弘編『歴史地理調査
ハンドブック』古今書院、2001。
奥須磨子「東京西郊における農村民の生活―
大正初期の駒沢村―」(原田勝正・塩崎文
雄編『東京・関東大震災前後』日本経済評
論社、1997)、93-124頁。
貝塚爽平『東京の自然史』紀伊國屋書店、
1979。
北村嘉行「世田谷の工業の性格」世田谷14、
1962。
北村嘉行「最近のボロ市」世田谷15、1963。
桜井正信「玉川周辺の歴史地理学的研究―と
くに地域開発の構造分析とその方法―」駒
澤地理3、1965。
鈴木勇一郎「近郊農村の都市化と宅地開発―
東京府荏原郡世田谷町における開発を事例
として―」地方史研究48-3、1998。
武内和彦「水が育てた豊かな台地―武蔵野の
水と緑―」(中村和郎・小池一之・武内和
彦編『日本の自然 地域編3 関東』岩波
書店)、96-104頁、1994。
竹内誠ほか『東京都の歴史』山川出版社、
1997。
平岡昭利編『北海道 地図で読む百年』古今
書院、2001。

- 平岡昭利編『東北 地図で読む百年』古今書
院、2000。
平岡昭利・野間晴雄編『中部1・2 地図で
読む百年』古今書院、2000。
平岡昭利編『中国・四国 地図で読む百年』
古今書院、1999。
平岡昭利編『九州 地図で読む百年』古今書
院、1997。
藤岡謙二郎監修『南海道の景観と変貌(七道
の景観と変貌Ⅱ)』古今書院、1984。
藤岡謙二郎監修『西海道の景観と変貌(七道
の景観と変貌Ⅲ)』古今書院、1987。
藤岡謙二郎監修『東山道の景観と変貌(七道
の景観と変貌Ⅳ)』古今書院、1982。
藤岡謙二郎監修『北陸道の景観と変貌(七道
の景観と変貌Ⅴ)』古今書院、1995。
藤岡謙二郎編『歴史のふるい都市群1―関東
とその周辺の都市―』大明堂、1984。
三田義春編著・東京都世田谷区教育委員会編
『世田谷の地名：区域の沿革・地誌・地名
の起源 下』東京都世田谷区教育委員会、
1989。
山鹿誠次「地域社会の変化―杉並の変容と江
戸・東京―」(『江戸から東京そして今』大
明堂、1993)、80-115頁。
山田安彦・山崎謹哉編『歴史のふるい都市群
2～12』大明堂、1989-1997。